C—76　幼児服の「あき」に関する一考察

昭和女大文家政　鈴木キミ子
○森　信子

1.　幼児が服を着脱するとき，きゅうくつそうにみえたり，また後明きや，とめ具の種類によっては周囲の者が着脱させてしまうことがしばしばみうけられるが「あき」の位置・大きさ・とめ具などについては，幼児の着脱の実態に即し，成人とは異なる立場から設計されなければならないと考え本実験を行った。

2.　3・4・5才の平常着・かぶり式を対象として，現在行われている各式作図法の比較と市販品調査を行い，これらを基礎として，あき寸法を頭囲+2・+4・+6・+8・+10・+12 の6種につき上記対象年令について幼児服を製作し，着脱実験を行い，幼児がどのようにして着脱するか，また所要時間を調査し，同時に「あき」に関する幼児の意識調査を面接法で試み，さらにとめ具3種(ファスナー・ボタン・スナップ)について取りはずし実験を行い観察した。

3.　①現在行われている作図法は「あき」に関して明確でない。②市販品は比較的あき寸法が小さく後あきが多いので自分で着脱しにくい。③着脱観察においては，心の働き・運動機能・身体のプロポーションが異なるため成人とは異なった着脱法が観察された。④成人は，頭囲+6 cm 内外が適当のように考えられるが，本実験から幼児は，頭部における最大包囲寸法を必要とするように思われた。